

長岡京右京二条三坊跡・上里遺跡の調査

(財)京都市埋蔵文化財研究所 高橋 潔

はじめに

この調査は、京都市の計画している大原野伏見・向日町線道路の新設工事に先立って、計画路線上を西から 2001 年に試掘調査、2003 年度・2005 年度・2006 年度に発掘調査を行ない、2007 年度の調査は第 4 年度目の発掘調査になります。

調査地は、京都市西京区大原野上里南ノ町地内に所在しており、長岡京の北西部、右京二条三坊一・八町跡に位置し、さらに縄文時代から中世にいたる集落遺跡・上里遺跡の中央東寄りの位置にあたっています。長岡京跡の調査では、右京第 903 次調査 (R903) となっています。

1 調査の概要

2006 年度に今回の調査地の西隣で行なわれた調査 (R878) では、長岡京期、弥生時代前期、縄文時代晩期の各時期の遺構・遺物が見つかっていました。とくに縄文時代晩期は竪穴住居が 7 棟まとまって見つかり、話題となりました。本調査はその東隣の調査でしたから、同様の成果が期待されました。

調査は 2007 年 5 月から 12 月まで 8 ヶ月間行ないました。2006 年度の成果と同様に、長岡京期、弥生時代前期、縄文時代晩期の各時期の遺構・遺物が見つかりました。縄文時代晩期の遺構については 2006 年度と同様に、現地にて現状保存という形で保護砂で覆い埋め戻しています。遺物は、土器類が整理箱にして 260 箱分、石器類が 80 箱分出土しました。

なお、この調査については 6 月には長岡京期、12 月には縄文時代晩期の遺構・遺物を対象として、それぞれ現地説明会を開催しております。

2 長岡京期

右京二条三坊一町と八町にあたっており、調査では想定されていた通りに東西の一条大路と南側溝、南北の西三坊坊間東小路と東西両側溝が見つかりました。西半の八町には掘立柱建物跡が 2 棟あり、そのうちの 1 棟である建物 1 は三間×三間の総柱で倉庫と考えられる建物です。2006 年度の調査では、八町のほぼ中央に二間×五間の建物五棟が整然と並んで建てられていました。

一町では、建物跡は見つかりませんでした。10 年間と短かった長岡京の北西部にも、しっかりと条坊が施工され、大規模な建物が整然と建てられていたことがわかりました。

3 弥生時代前期

主な遺構には竪穴住居 1 棟、土器棺墓 2 基、土坑、溝などがあります。竪穴住居 687 は、東側 1／3 程度が長岡京期の遺構によって削られてしまっていたましたが、径が 7～8 m の楕円形の大型の住居で、ほぼ中央に楕円形の土坑 509 があります。この土坑 509 が中央の炉跡と考えますが、床面にはほかにも火を受けて赤く変色した箇所が数箇所あり、これらも炉のようなものではないかと思われます。

土器棺墓は、形の異なる 2 個体の壺形土器を組み合わせたものです。2006 年度には、4 基見つっていますから、今回のものを合せて 6 基ということになります。

いずれも弥生時代前期、畿内第 I 様式新段階の土器です。

4 縄文時代晩期

縄文時代晩期の遺構・遺物が、今回の調査では最も多く見つかっています。2006 年度調査では、竪穴住居 7 棟、土器棺墓 6 基、土壙墓 3 基などが見つかっています。2007 年度調査では、竪穴住居 1 棟、土器棺墓 18 基、土壙墓 1 基、炉跡 3 基、溝状遺構 2 条などが見つかりました。2006 年の成果とあわせてみますと、大きく西部と東部にわけて見ることができます。

西部には竪穴住居 8 棟のほか、土器棺墓 14 基・土壙墓 4 基などがあります。溝 1215 がこの住居域の東端を限る役割を担っていたと考えられます。

溝 1215 は、自然に形成された凹みを利用したものと考えられ、幅 10 m 前後、北から湾曲して東へ向かい途切れます。北と東が浅く、湾曲した中央部は約 1 m と深くなっていて、水が溜まっていたようです。溝の中には、ほぼ全域にわたって土器類・石器類とともに、多量の炭化物が住居域側から棄てられて、堆積する状況が認められました。これらは日々の生活の中で、不要な物が捨てられたものと考えられ、溝の堆積土の一部を持ち帰って詳細に調べることにしました。

一方、東部には溝 1067 があり、その南にも土器棺墓 7 基や焼土魂などが見つかっています。住居跡は見つかりませんでした。もとは住居域であったものが削られてなくなってしまったと考えられます。溝 1067 は、人工的に掘削された幅 4 m の溝で、東西方向から大きく南へ湾曲して東へ延びています。

また、溝 1215 の北側は比較的遺構の密度が低いものの、滑石製勾玉や翡翠製丸玉などが出土しており、ほかの住居域とは異なる特別な地域とも考えられます。

出土した遺物は深鉢・浅鉢など滋賀里Ⅲ a～Ⅲ b 式 (縄文時代晩期中葉) を中心とした土器類 (コンテナ 160 箱) と石鏃・石錐・小型磨製石斧・石刀・敲石・磨石・凹石・台石など石器類 (コンテナ 80 箱) のほか、滑石製勾玉、翡翠製丸玉などがあります。

5 溝 1215 の堆積土の分析

縄文時代晩期の溝 1215 は、先にも触れたように住居域の東端に位置していて、堆積土の下層には大量の土器・石器類とともに炭化物が多量に混じった状態で埋まっていた。このため、溝の堆積土の一部 (整理箱に 340 箱) を水洗いしてフルイにかけ、内容の分析をすることにしました (水洗選別)。

作業はまだ途中ですが、下層の堆積土を中心にして、多量の炭化木材の破片とともに、小動物（ほ乳類・魚類）の骨小片、炭化した穀物種子（マメ・コメ）・堅果類（ドングリ・クリ・クルミ）・樹木種子（サシショウ）などが見つかりました。これまでに、マメは数十粒、コメは4粒、堅果類も比較的多く見つかっています。

これらのうちの一部のものについて、国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）へAMS法による炭素14年代測定を依頼し、同じ層から見つかったコメ1粒とマメ1粒の測定結果が出ました。

コメ 測定値 2365±25年¹⁴CBP

⇒較正年代 510～435年BC (40.0%)、430～390年BC (55.0%)

マメ 測定値 2895±25年¹⁴CBP

⇒較正年代 1190～1170年BC (4.15%)、1165～1140年BC (4.8%)、1130～1000年BC (86.2%)

測定の結果からは、マメは近畿地方の縄文晩期中葉の年代、一方コメは近畿地方の弥生前期前半の年代を示しています。

おわりに

今回の調査では2006年度の調査の成果と同様に、長岡京期、弥生時代前期、縄文時代晩期の各時期の遺構・遺物が見つかりました。

特に、2006年度の成果と合せて、縄文時代晩期の成果は注目すべきものです。これまで近畿地方でも見つからなかった竪穴住居群と土器棺墓・土壙墓がまとまり、当時の集落の様子がわかる数少ない実例として評価されます。土器や石器も多量に出土しており、土器の様相から晩期中葉（滋賀里Ⅲa式～Ⅲb式）と考えられます。溝1215の堆積土の分析により小動物の骨片や炭化した植物の種実が多量に出土しました。これは当時の食生活を復原する上で大変貴重な資料になると思われま

す。溝1215出土の炭化したマメ・コメについて、最新の炭素14年代測定を行ないました。マメの測定年代は今からおおよそ3,000年前で、出土する土器の晩期中葉の年代と一致する数値です。一方、同じ層から出土したコメについては、500～600年新しい、弥生時代前期前半の年代を示しました。同じ層から出た種実の、このような年代の差をどのように考えるか、非常に難しい問題です。

この一連の調査は、本調査の一部と東隣の部分を残しており、次年度以降に調査が予定されています。また、この調査の溝1215の堆積土の分析も、水洗選別がこれまでに全体の10%程が終了したに過ぎません。作業を進めれば、さらに多くの資料が得られることでしょう。

《参考文献》

家根祥多「近畿地方の土器」『縄文文化の研究』（第4巻 縄文土器Ⅱ）、雄山閣、1981年。

西本豊弘編『縄文時代から弥生時代へ』（新弥生時代のはじまり 第2巻）、雄山閣、2007年。

春成秀爾・今村峯雄編『弥生時代の実年代』、学生社、2004年

『長岡京右京二条八・九町跡、上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-34、2007年。

『長岡京右京二条一・八町跡、上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-12、2008年。

《用語解説》

「炭素14年代測定法」

炭素には原子の構造により炭素12・炭素13・炭素14の三種類の同位体があり、植物・動物およびそれらを原材料とするものに例外なく、一定の割合で含まれている。このうちの炭素14には放射線（β線）を放出しながら少しずつ窒素へ変わっていく性質（放射壊変）があり、元あった量の半分になるまでの時間（半減期）が一定で5,730±40年であることがわかっている。動・植物は常に炭素を取り入れ体内の炭素14の濃度は大気中の濃度に等しく保たれているが、死ぬと炭素が取り込まれなくなり炭素14は放射壊変をはじめてその濃度が減少し続ける。試料の炭素14の濃度を測ることにより、動・植物が死んでから経過した時間を算出する方法。過去の大気中の炭素14の濃度が一定であると仮定し、西暦1950年を起点としてさかのぼった年数で示される（単位：年¹⁴CBP）。

「暦年較正年代」

得られた炭素14年代を実際の年代（暦年代）に較正したもの。実際には過去の大気中の炭素14の濃度は一定でないことが明らかになっており、これまでに蓄積されたデータや樹木の年輪年代法により確定された年輪の測定などから得られたデータを元に作られた較正曲線によって、炭素14年代を暦年代に変換する（暦年較正）必要がある。これまで1998年に改訂された国際データベースINTCAL98が用いられていたが、樹木年輪の測定結果などで補正したINTCAL04が2004年に公表され、さらに精度の高い較正年代が得られるようになった。

INTCAL98・04は炭素14年代を縦軸、較正年代を横軸としたグラフで表されている。

「AMS法（Accelerator Mass Spectrometry）」[加速器質量分析法]

炭素試料をイオン化して、それに含まれる炭素14イオンの量を直接計数する方法。従来行われてきた炭素14が放射壊変する際に放出するβ線を放射線検出器で計測する「β線計数法」に比べ、分析に用いる炭素の量が1mg程度と少なく、短時間で、高精度、より古い時代までの測定が可能になった。正確な炭素14イオンの量を計測するために、前処理として試料に吸着・混入した可能性のある外来の炭素物質の徹底的な除去が必要とされる。

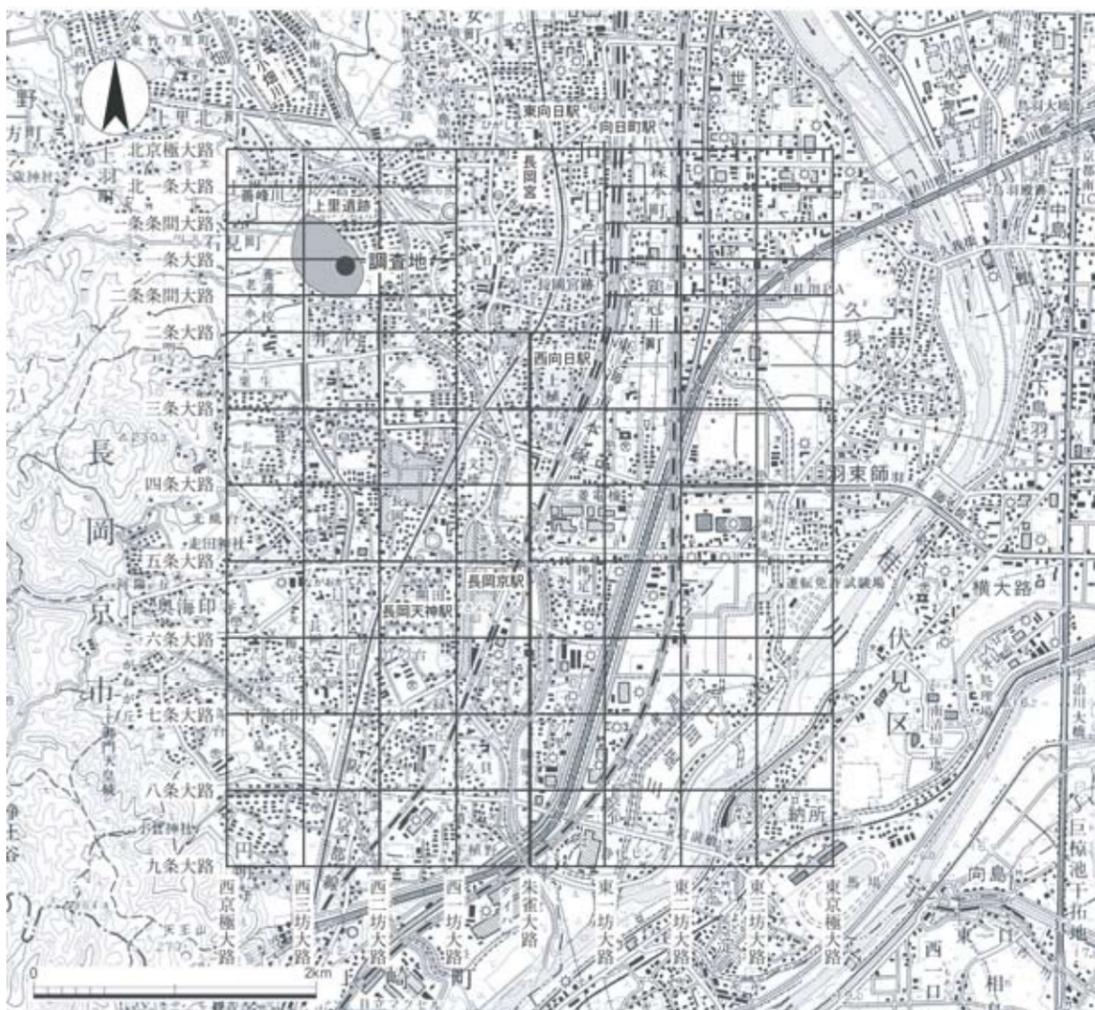


図1 調査位置図 (1/50,000)

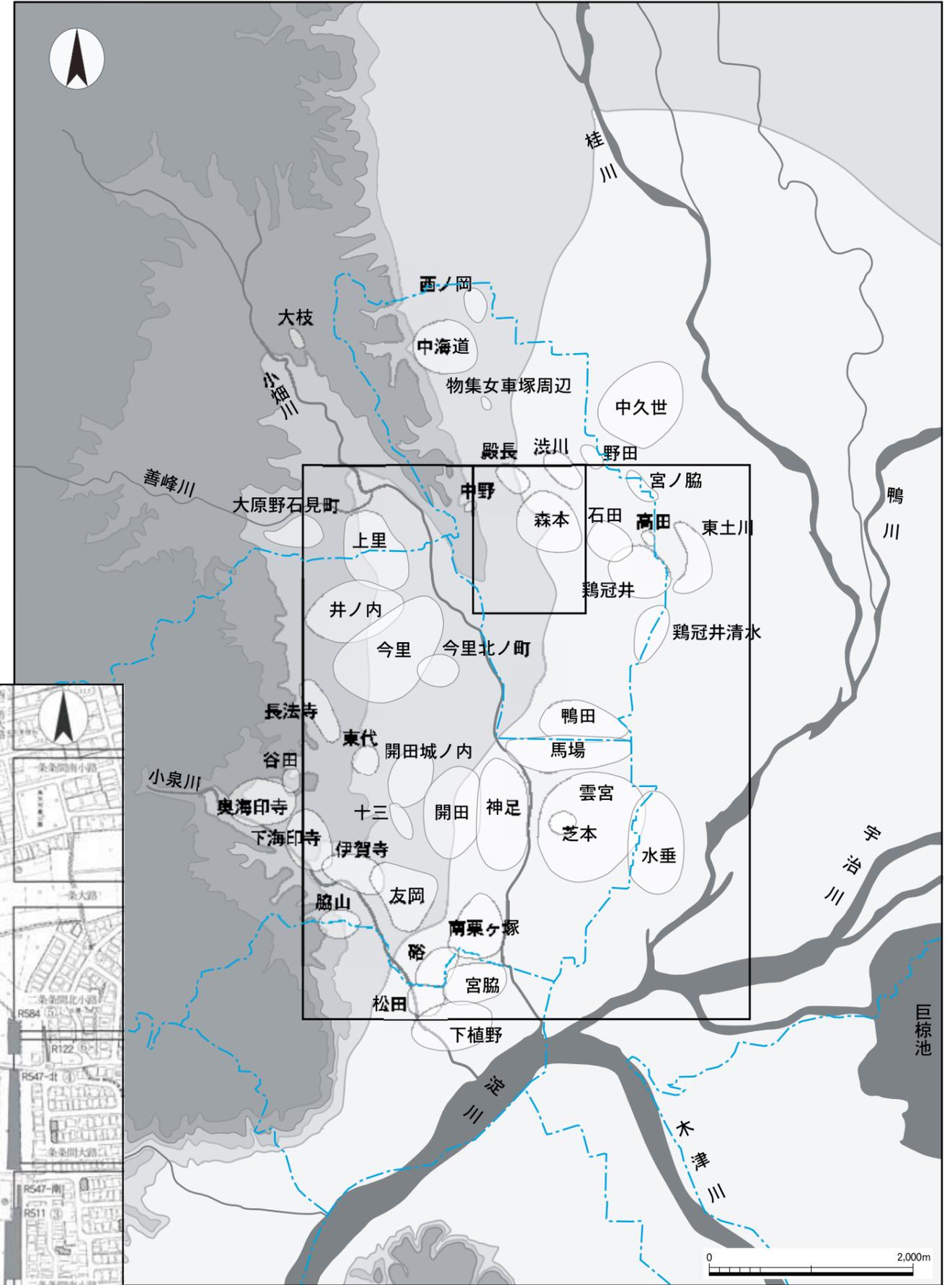


図3 乙訓地域縄文晩期～弥生前期遺跡分布図

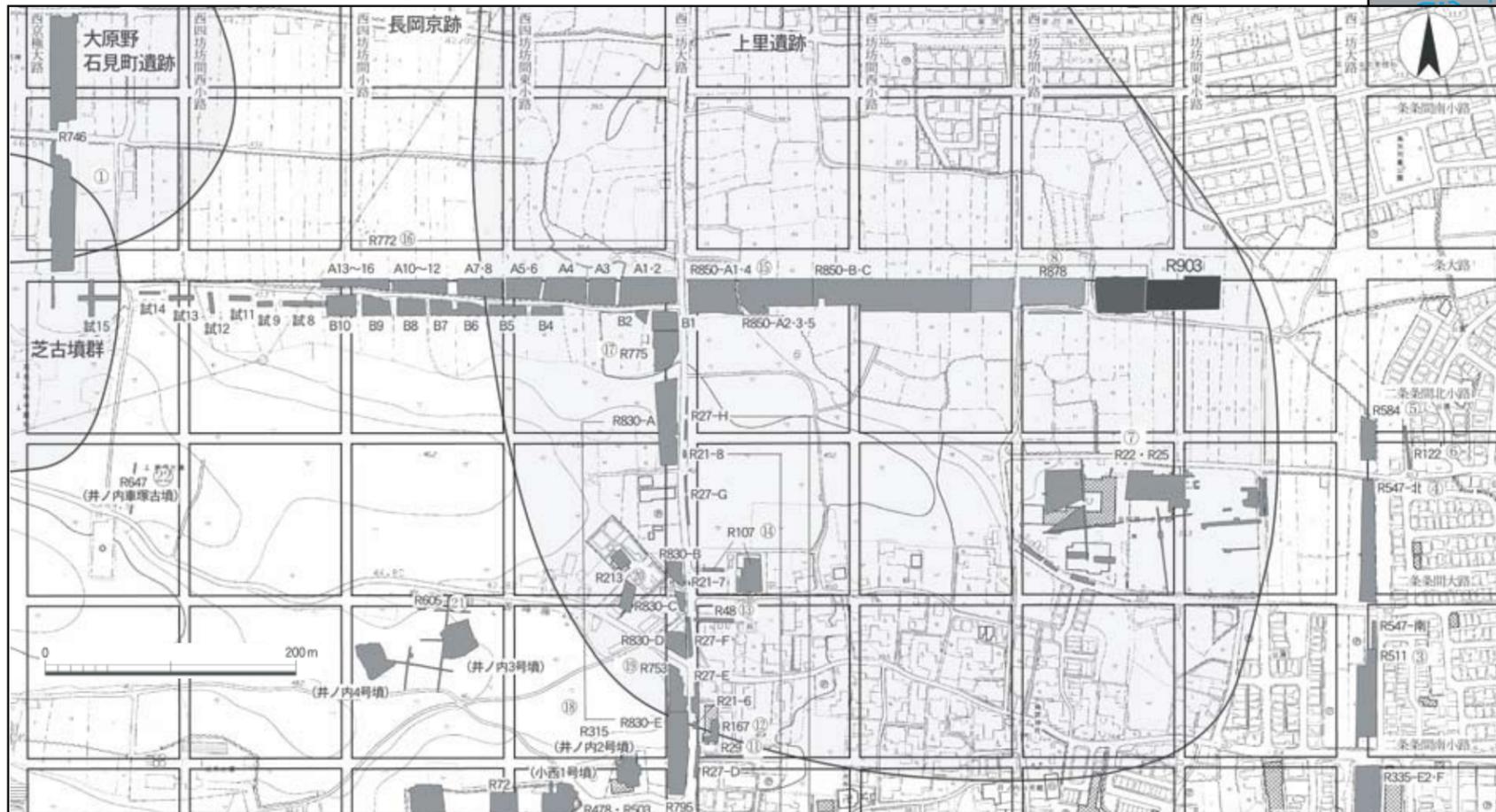


図2 調査地位置図および周辺調査地点 (1/5,000)

西三坊坊間小路

西三坊坊間東小路

一条大路

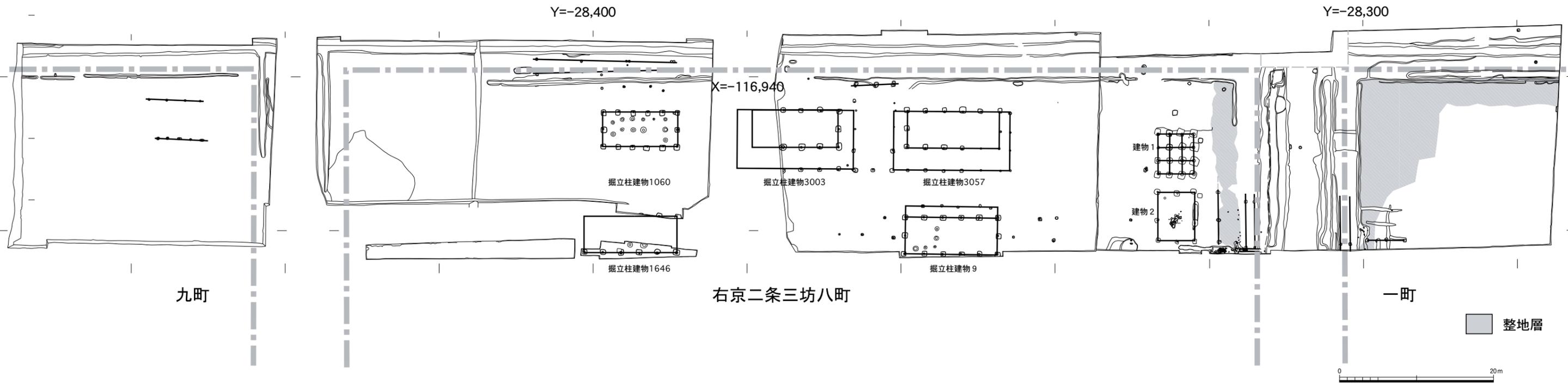


図 4 長岡京期 遺構略図 (2006年度・2007年度)

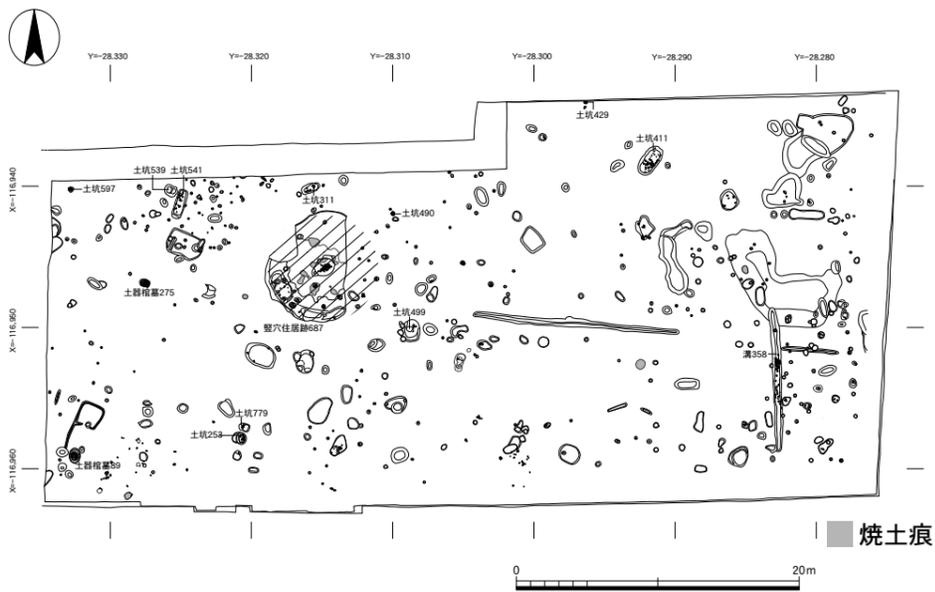


図 5 弥生時代前期 遺構略図 (2007年度)

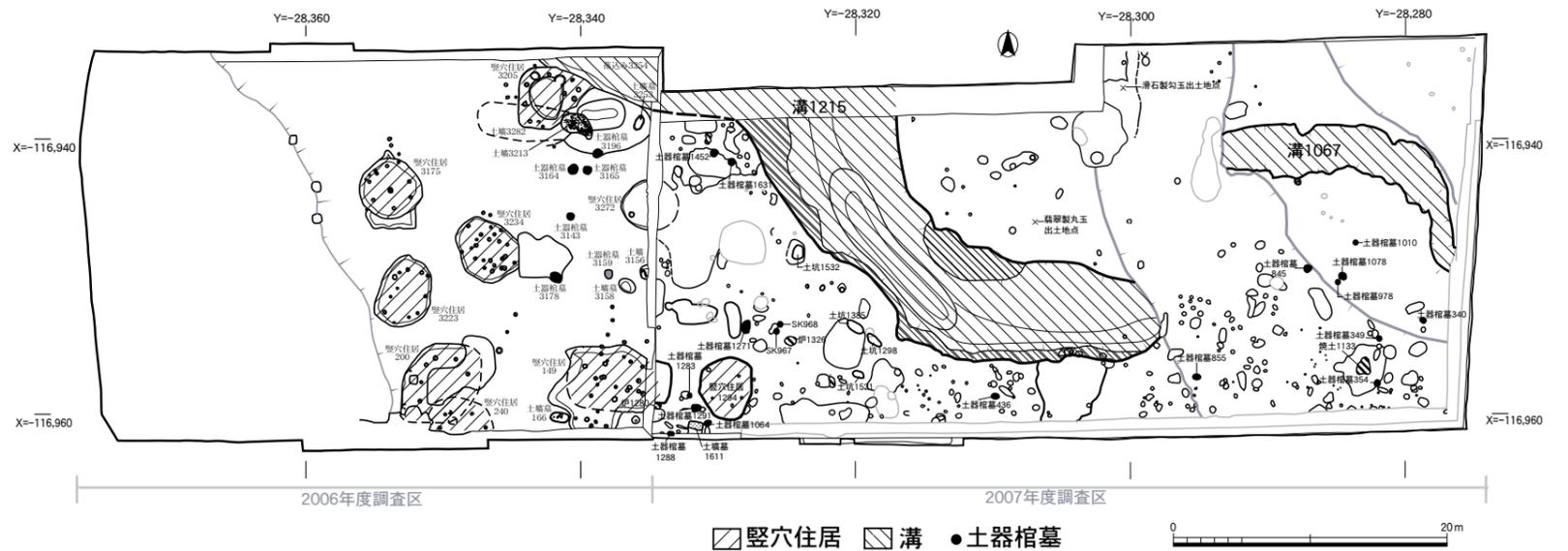


図 6 縄文時代晩期 遺構略図 (2006年度・2007年度)

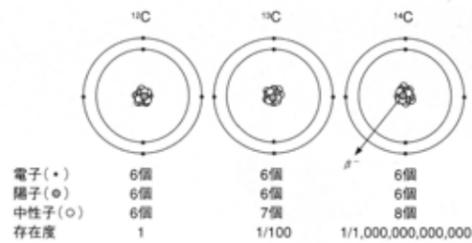


図1 炭素12, 13, 14の原子構造

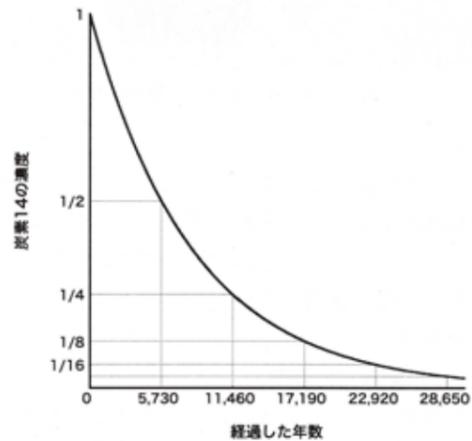


図2 時間とともに壊変する炭素14

図7 炭素14について

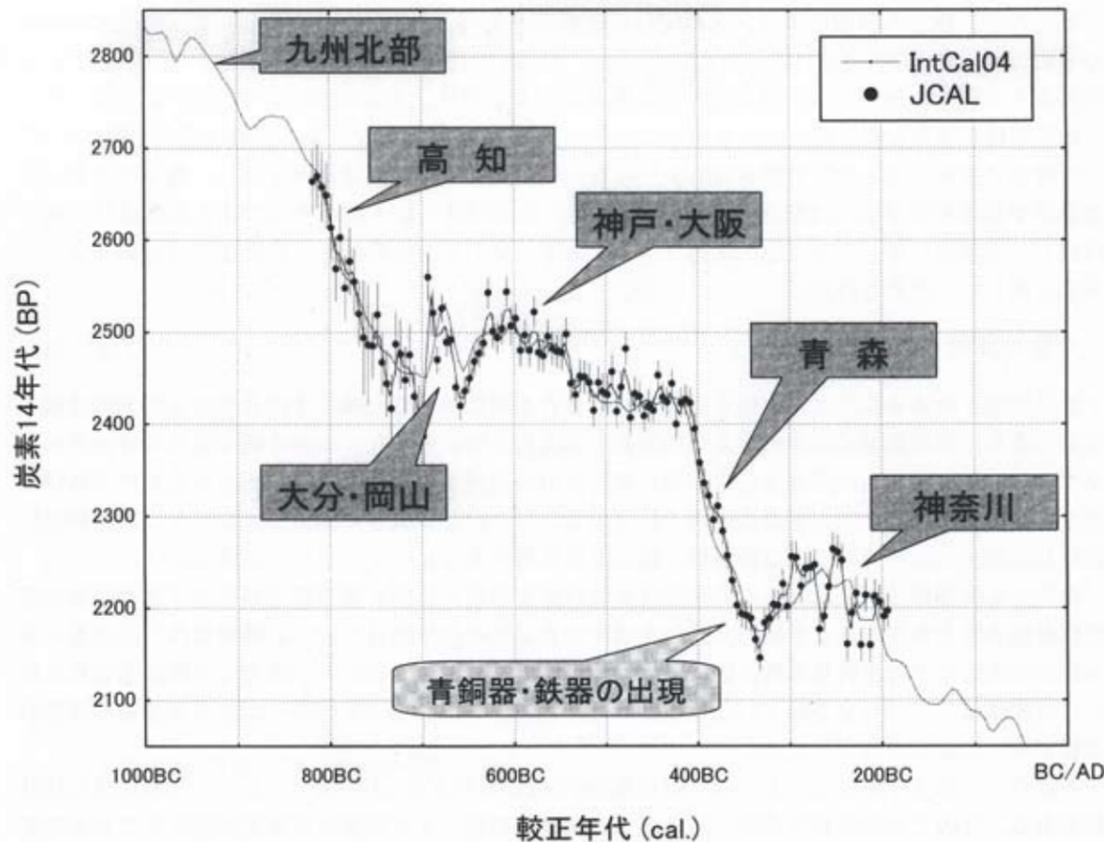


図8 各地の水田稲作開始時期と日本版較正曲線

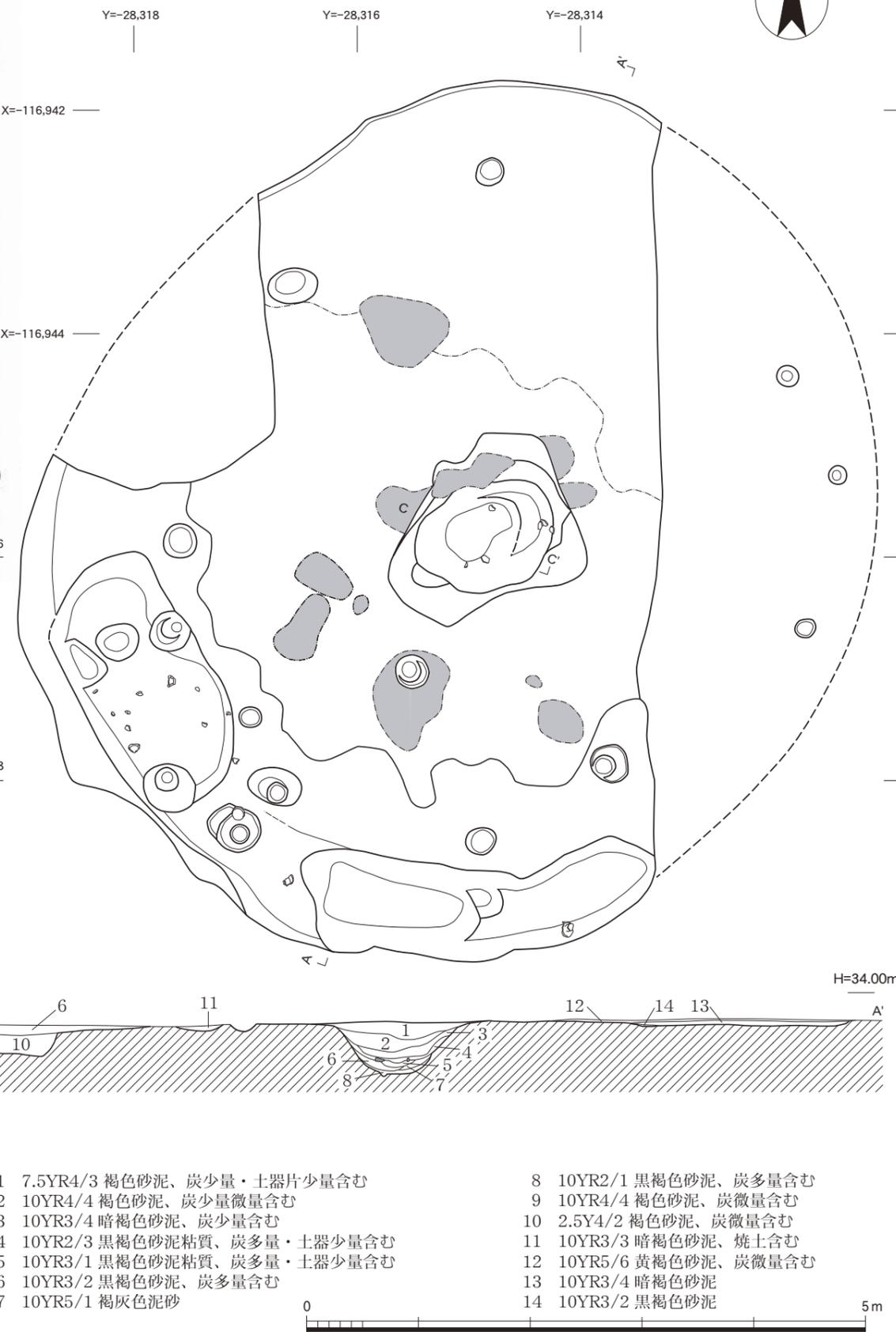


図11 竪穴住居687 (彌生時代前期、1/100)

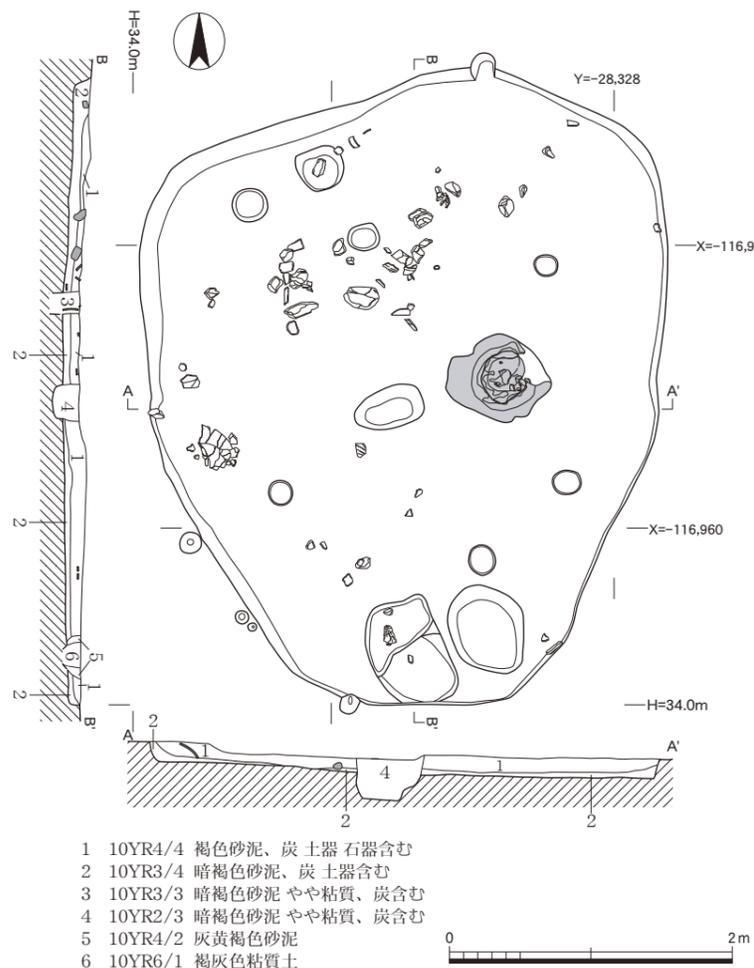


図9 竪穴住居1294 (縄文時代晩期、1/100)

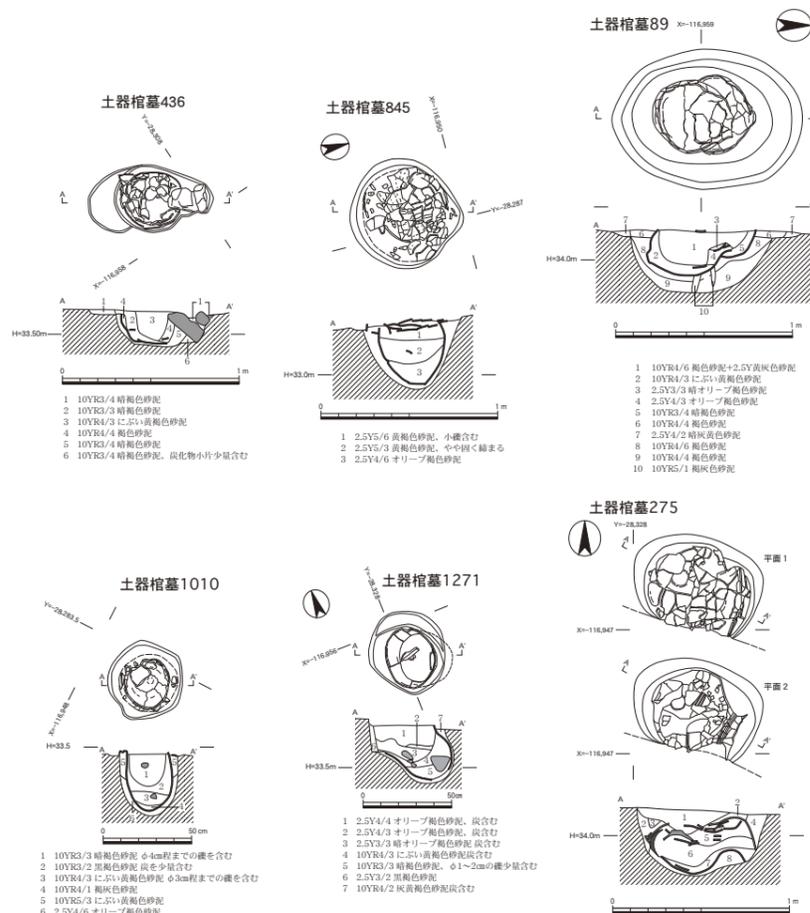
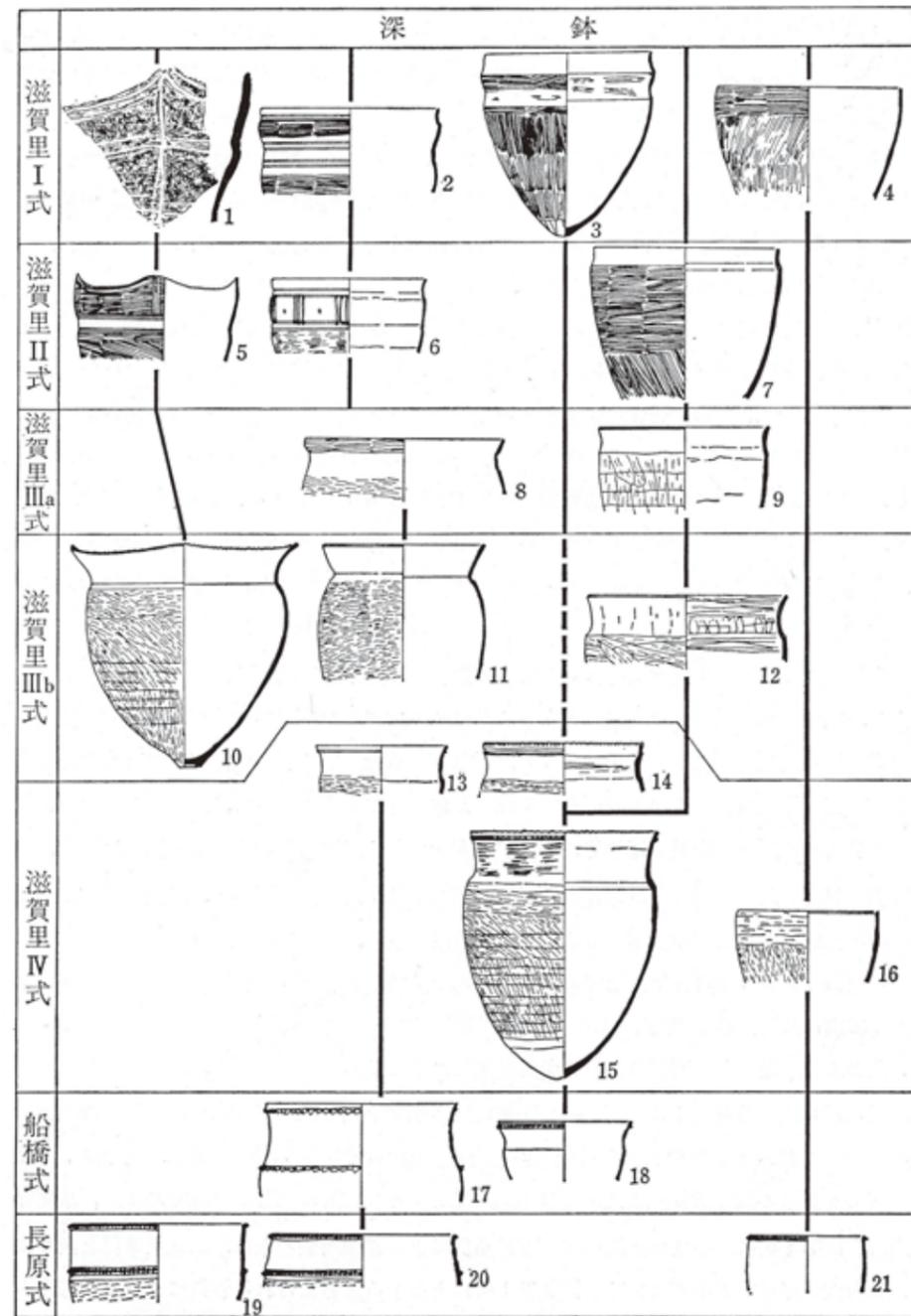


図10 土器棺墓 (1/40)

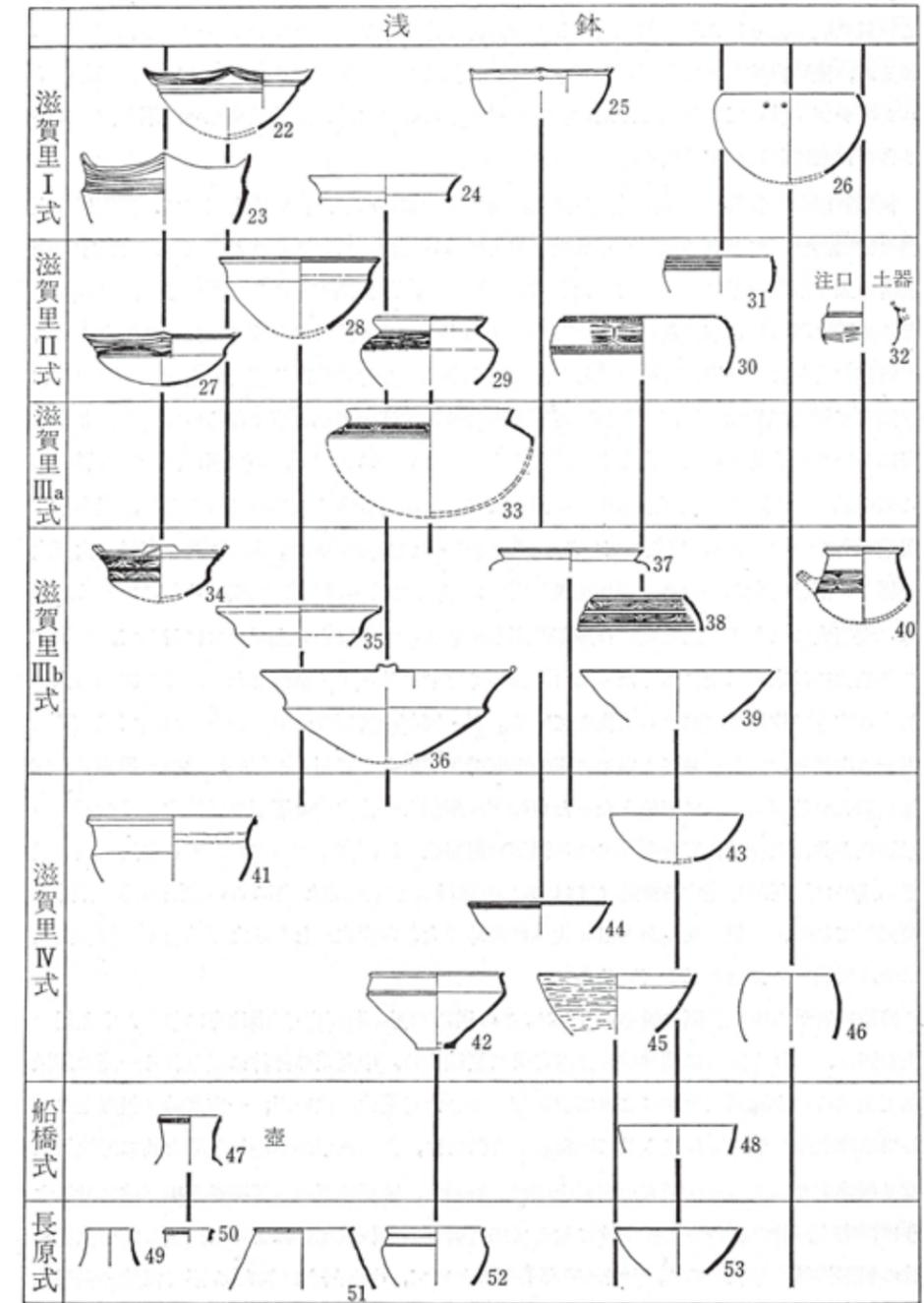
縄文時代晩期：436・1010・845・1271
 弥生時代前期：89・275

- | | |
|------------------------------|------------------------|
| 1 7.5YR4/3 褐色砂泥、炭少量・土器片少量含む | 8 10YR2/1 黒褐色砂泥、炭多量含む |
| 2 10YR4/4 褐色砂泥、炭少量微量含む | 9 10YR4/4 褐色砂泥、炭微量含む |
| 3 10YR3/4 暗褐色砂泥、炭少量含む | 10 2.5Y4/2 褐色砂泥、炭微量含む |
| 4 10YR2/3 黒褐色砂泥粘質、炭多量・土器少量含む | 11 10YR3/3 暗褐色砂泥、焼土含む |
| 5 10YR3/1 黒褐色砂泥粘質、炭多量・土器少量含む | 12 10YR5/6 黄褐色砂泥、炭微量含む |
| 6 10YR3/2 黒褐色砂泥、炭多量含む | 13 10YR3/4 暗褐色砂泥 |
| 7 10YR5/1 褐灰色泥砂 | 14 10YR3/2 黒褐色砂泥 |

| | |
|------|----------------|
| 縄文後期 | |
| 縄文晩期 | 滋賀里Ⅱ式 |
| | 滋賀里Ⅲa式 |
| | 滋賀里Ⅲb式／篠原式 |
| | 滋賀里Ⅳ式／口酒井式 |
| | 船橋式 |
| | 長原式 第Ⅰ様式(古) |
| 弥生前期 | 第Ⅰ様式(中) |
| | 第Ⅰ様式(新) |
| 弥生中期 | |



第1図 近畿地方晩期の編年 (S=1/12, 1のみ 1/6) 滋賀里 (1~8, 10, 11, 13, 15, 16, 22~32, 35~39, 42~46) 恩智 (9, 12, 14) 船橋 (17, 18, 47, 48) 長原 (19~21, 49~53) 篠原 (33, 34, 40, 41)



土器は、文献 1), 10), 12), 14) によったが、滋賀里遺跡出土の 8.23 および図 2 は坪井清足氏、長原遺跡出土土器は大阪市文化財協会の御好意により筆者の実測した未発表資料を掲載させていただいた。縮尺は 1 以外はすべて 1/12 である。

図12 近畿地方縄文晩期～弥生前期 土器型式模式図

図13 縄文時代晩期の土器編年表 (家根1981より)